W-3-3　2 音節名詞第 4/5 類に対応する琉球祖語 B 類は改新であるとする仮説

五十嵐陽介（国立国語研究所）

要旨　2 音節名詞第 4/5 類に琉球祖語の B 類と C 類が対応する事実は、1) 琉球祖語における語末狭母音と 2) 琉球祖語の段階まで保持された日琉祖語における多形態素性という 2 つの要因に条件付けられた分裂の結果であるとする仮説を提案した。日琉祖語における多形態素性は、上代中央語における語中の母音の分布、語源分析、諸方言における分節音の対応の不規則性に基づいて再建される。

1. はじめに

日本語の 2 音節名詞には 5 つのアクセント類が再建される[13]。琉球祖語（pR）には A 類、B 類、C 類の 3 つのアクセント類が再建される[5,6,18]。日本語の第 1 類と第 2 類は pR の A 類に対応し、第 3 類は少数の例外を除いて pR の B 類に対応する。第 4 類と第 5 類の約半数は、pR の B 類に、残りは pR の C 類に対応する[5,6,17]。この第 4/5 類名詞における分裂対応を生じさせる音韻条件が見つからないことから、日琉祖語（pJ）の第 4/5 類名詞には 4 種類の下位アクセント類が再建されている[6,28,34]。

しかしながら従来の研究は、pJ における名詞の語形成がアクセントの変化に与えうる効果を十分に検討してない。本稿が明らかにするように、第 4/5 類名詞の一部には、複数の形態素から構成される形式が再建できる。この pJ における多形態素性（polymorphemic nature）が、pR の段階においてなお保持されていたと仮定することで、第 4/5 類名詞における分裂対応は、pJ におけるアクセントの区別を反映するものではなく、pR における分裂の結果とみなすことが可能となる。

本稿は、第 4/5 類における分裂対応は、1) pR における語末狭母音と 2) pR の段階まで保持された pJ における多形態素性とに条件付けられた分裂の結果であるとする新しい仮説を提案する。pJ における多形態素性は、上代中央語（OJ）における語中母音の分布、語源分析、諸方言における分節音の対応の不規則性に基づいて再建される。本稿における日本語のアクセント類は金田一[13]に、pR の語形と類は Igarashi [9]に、OJ の語形は『時代別国語大辞典上代編』[10]と ONCOJ [23]に基づく。

表 1. 日本語（京都、大分[8]）と琉球諸語（与論[11]、今帰仁[21]）のアクセントの対応

日本語の類	pR の類	下位類		京都	大分	与論	今帰仁
1 類	A		「鼻」	háná	haná-gá	pana	pʰanáá
			「水」	mízú	midú-gá	mizi	midʑíí
2 類	A		「音」	ótо	otó-gá	utu	ɸut'úú
			「雪」	júki	jukí-gá	juki	jutʑ'íí
3 類	B		「山」	jáma	jamá-ga	jamá	jamaá
			「年」	tóɕi	toɕí-ga	tuɕí	tʰuɕií
4 類	C	2.4a	「中」	naká	náka-ga	náá	náhaa
			「息」	ikí	íki-ga	íkí	ʔítʑ'i
	B	2.4b	「肩」	katá	káta-ga	hatá	hat'aá
			「麦」	mugí	múgi-ga	mugí	mudʑií
5 類	C	2.5a	「鍋」	nabê	nábe-ga	nábí	nábi
			「猿」	sarû	sáru-ga	sárú	sáru
	B	2.5b	「雨」	amê	áme-ga	amí	amií
			「汗」	asê	áse-ga	aɕí	aɕií

2. 分裂を生じさせる要因

2.1 語末狭母音

第 4/5 類名詞のうち語末に狭母音を持つものが C 類に、非狭母音を持つものが B 類に対応する傾向があることは（表 2）これまでも指摘されている[2,7,9,12,30]。この傾向に基づき、第 4/5 類名詞の分裂対応を、語末母音に条件づけられた分裂と合流の結果とみなす仮説も提案されている[7,12,30]。すなわち、語末に非狭母音を持つ第 4/5 類名詞は第 3 類名詞と合流したが、語末に狭母音を持つものは他の類と合流しなかったとする仮説である。この仮説では、第 4/5 類名詞の下位アクセント類は pJ に遡らず、pR における改新の結果とみなされる。しかしこの仮説は、その例外の多さから広く受け入れられていない。

しかしながら、もし語末の狭母音のほかに分裂を生じさせる要因があるのならば、問題の分裂対応が pR における音変化の結果とする仮説が支持されることとなる。本稿は、その見逃されてきた要因は pJ における多形態素性であると提案する。

表 2. pR のアクセント類と語末母音とに基づく 4/5 類名詞の分類[9]

pR 類	非狭母音終わり	狭母音終わり
C	15 語 *ato「跡」、*ito「糸」、*jado「宿」、*kesa「先刻」、*kuda「管」、*naka「中」、*pera「篦」、*pune「船」、*sora「梢」（以上 4 類）、*kage「陰」、 *koe「声」、*mae「前」、*moko「婿」*nabe「鍋」、*woke「桶」（以上 5 類）	21 語 *beni「紅」、*iki「息」、*kami「上」、*keu「今日」、*matu「松」、*nau「何」、*nusi「主」、*obi「帯」、*omi「海」、*Usu「臼」、*pari「針」、*pasi「箸」、*suzi「筋」、*tubu「粒」、*tumi「罪」、*tuti「鎚」、*wanu「我」（以上 4 類）、*kobu「蜘蛛」、*saru「猿」、*tabi「足袋」、*tuju「露」（以上 5 類）
B	29 語 *awa「粟」、*ine「稲」、*ita「板」 、*kado「角」、*kama「鎌」、*kasa「笠」、*kata「肩」、*keta「桁」、*mino「蓑」、*miso「味噌」、*nae「苗」、*pada「肌」、*poka「他」、*saja「莢」、*soba「傍」、*soto「外」、*tane「種」、*toga「咎」、*wana「罠」、*wara「藁」（以上 4 類）、*ame「雨」、*ase「汗」、*koto「琴」、*mado「暇」、*majo「繭」、*majo「眉」、*momo「腿」、*puna「鮒」、*tate「縦」（以上 5 類）	10 語 *kasu「糟」、*kinu「衣」、*mogi「麦」、*nomi「鑿」、*ori「瓜」、*siru「汁」、*zeni「銭」（以上 4 類）、*ai「藍」、*kimi「黍」（以上 5 類）、*joru「夜」（4~5 類）

2.2 多形態素性 1：OJ における甲類・乙類の母音の分布

OJ の母音の甲類・乙類の書き分けは母音の対立の反映であるとみなされている。甲類・乙類の分布には著しい偏りがあり、オ列甲類（o_1）、エ列甲類（e_1）、エ列乙類（e_2）、イ列乙類（i_2）は語中に現れることが極めて少ない[4]。語中における例外的な o_1, e_1, e_2, i_2 の分布は（1）のように説明されてきた。（1ab）は語中に o_1, e_1, e_2, i_2 を持つ語は pJ において多形態素的形式であったとする説明である。

（1） a. 多形態素形式が語彙化（単形態素化）した際の母音縮約（lexical contraction）

pJ *kazu-apai 数-合へ ＞OJ $kazo_1pe_2$ 「数へ」[24]

pJ *saki-ari 咲き-有り ＞OJ $sake_1ri$ 「咲けり」[24]

b. 語中の形態素境界[4][i]

pJ *to-nusi 戸-主 ＞OJ to_1zi「妻」 [10]

pJ *me-pi 女-姪/甥 ＞OJ me_1pi「姪」 [16]

c. 借用

OJ ke_1sa「袈裟」[4,10]

第 4/5 類名詞には語中に o_1, e_1, e_2 を持つ語が 6 語[ii]あり（2）、2 語（2fg）を除きすべて C 類に属する。

（2）
a. OJ *ke₁pu*「今日」 :: pR *kepu C「今日」
b. OJ *ke₁sa*「今朝」 :: pR *kesa C「先刻」
c. OJ *mo₁ko₁*「婿」 :: pR *moko C「婿」
d. OJ *pe₁ra*「箆」 :: pR *pera C「箆」
e. OJ *so₁ra*「空」 :: pR *sora C「梢」
f. OJ *keta*「桁」 :: pR *keta B「桁」
g. OJ *jo₁ru*「夜」 :: pR *joru B「夜」

語中の o_1, e_1, e_2 の分布から、（2）は（借用語でないのならば）pJ において多形態素形式であったことが示唆される[iii]。pR *keta B「桁」は pR の段階以前に語彙化（単形態素化）され、多形態素性の痕跡を失ったと解釈される。pR *joru B「夜」は例外であり別の説明が必要である（3 節参照）。

2.3 多形態素性 2：有坂法則の違反

有坂法則は、*a* あるいは o_1 とオ列乙類（o_2）とが同一形態素内に共起することを禁ずる OJ における音素配列論上の制約である[1]。第 4/5 類名詞には、それを単形態素形式と仮定する限り、有坂法則に違反する語が 5 語あり（3）、2 語（3ab）が pR C 類に属する。

（3）
a. OJ *ato₁* ~ *ato₂*「跡」 :: pR *ato C「跡」
b. OJ *ko₂we*「声」[iv] :: pR *koe C「声」
c. OJ *to₂ga*「咎」 :: pR *toga B「咎」
d. OJ *poka*「外」 :: pR *poka B「外」
e. MJ *soba*「傍」 :: pR *soba B「傍」

しかし、もし（3）が多形態素形式であるならば有坂法則の違反は生じない。有坂法則の見かけ上の違反は語中の形態素境界の存在を示唆する[v]。*toga B「咎」、*poka B「外」、*soba B「傍」は pR の段階までに透明性を失い、多形態素性の痕跡を失ったと解釈できる。

2.4 多形態素性 3：語源分析

『時代別国語大辞典上代編』[10]、『岩波古語辞典』[25]、松本[19]は 2 音節名詞の一部を多形態素形式として分析しており、その語源分析の結果はほぼ一致している。多形態素形式の透明性を支える証拠が OJ の段階まで保持されていたことが、語源分析に関する意見の一致をもたらしたと考えられる。

先行研究が多形態素形式とする第 4/5 類名詞は 9 語あり（4）、1 語（4i）を除きすべて C 類に属する。

（4）
a. OJ *jado₁*「宿」 ← OJ *ja* 屋 ＋OJ *to₁* 戸/処 :: pR *jado C「宿」
b. OJ *ato₂*「跡」 ← OJ *a(si)* 足 ＋OJ *to₂* 跡 :: pR *ato C「跡」
c. OJ *ke₁pu*「今日」 ← *ki 此 ＋*apu 日（注 iii 参照） :: pR *keu C「今日」
d. OJ *ke₁sa*「今朝」 ← *ki 此 ＋OJ *asa* 朝（注 iii 参照） :: pR *kesa C「先刻」
e. OJ *naka*「中」 ← OJ *na* 中 ＋OJ *ka* 処 :: pR *naka C「中」
f. OJ *nabe₂*「鍋」 ← OJ *na* 菜 ＋OJ *pe₂* 瓮 :: pR *nabe C「鍋」

g.	OJ *mape*$_1$「前」	← OJ *ma* 目 ＋OJ *pe*$_1$ 辺	::	pR *mae C「前」
h.	OJ *woke*$_2$「桶」	← OJ *wo* 苧 ＋OJ *ke*$_2$ 笥	::	pR *woke C「桶」
i.	OJ *mado*$_1$「窓」	← OJ *ma* 目/間 ＋OJ *to*$_1$ 戸/処	::	pR *mado B「暇」

本稿も（4）は pJ において多形態素形式であったとみなす。pR の自由形式 *ja B「家」、*to A「戸」、*na B「菜」、*wo B「苧」は*jado C「宿」、*nabe C「鍋」、*woke C「桶」の多形態素性の保持に貢献したに違いない。*mado B「暇」は、pR の段階までに多形態素性の痕跡を失ったと解釈できる。この語に生じた「窓」>「暇」の意味変化[9]は形態素の透明性の消失を招いたに違いない。

2.5 多形態素性 4：諸方言における分節音の対応の不規則性

第 4/5 類名詞の中には、諸方言間の分節音の対応が不規則なものがある。不規則性は第 1 音節の長母音、第 1 音節の尾子音、消失しない語中無声両唇破裂音として現れる。筆者の調査によると、このような不規則性を見せる第 4/5 類名詞は 9 語あり（5）、1 語（5i）を除いてすべて C 類に属する。

（5）
a. pR *woke C「桶」 ***oo**ke*「桶」（島原[27]，白峰[22]，岐阜[29]，三重[29]）
b. pR *nabe C「鍋」 *n**aa**be*「鍋」（白峰[22]）
c. pR *sora C「梢」 *s**uu**ra*「虚言」（大分[29]）
d. pR *kage C「陰」 *k**aa**ge*「陰」（島原[27]），*ka**ŋ**ge*「陰」（白峰[22]），
*ka**ŋ**ŋe*「裏側」（山形[29]），*ka**ŋ**ŋi* 「陰」（与那国[33]）
e. pR *kesa C「先刻」 *çi**s**sa*「先刻」（与論[11]），*k^{h}i**s**sa*「先刻」（今帰仁[21]），
*ki**s**sa*「先刻」（首里[14]）
f. pR *ato C「跡」 *ʔa**t**t'oo*「跡」（今帰仁[21]）
g. pR *ito C「糸」 *i**t**tɕu*「糸」（知名[18]），*i**t**tɕuu* 「糸」（与論[11]）
h. pR *keu C「今日」 *kɨ**b**u*「今日」（芦花部[32]）
i. pR *mino B「蓑」 *m**ii**no*「蓑」（島原[27]）

本稿は、これらの不規則性を pJ における多形態素性の痕跡と解釈する[vi]。pR *woke「桶」、*nabe「鍋」、*kesa「先刻」、*ato「跡」、*keu「今日」に関しては先行研究の語源分析（2.4 節）によって多形態素形式が再建されており、このことは本稿の解釈の妥当性を裏打ちする。第 1 音節の長母音の 1 部は、1 モーラ形態素を禁じる Foot Binarity 制約[20]による長母音化の残存として解釈される。第 1 音節の尾子音は多形態素形式が語彙化（単形態素化）する際の縮約による分節音の脱落の結果として解釈される。長母音の 1 部もこれに含まれるだろう。消失しない語中無声両唇破裂音もまた、縮約の結果と解釈できるだろう。pR *kage「陰」、*kesa「先刻」、*ato「跡」、*ito「糸」、*keu「今日」に関しては、琉球語諸方言の一部において多形態素性の痕跡が子音として保持されていることから、その pR 形として第 1 音節に尾子音を含む形式（例えば pR *kange, *kessa, *atto, *itto, *keppu）を再建する必要があるだろう。「蓑」は pR の段階以前に既に語彙化（単形態素化）され、多形態素性の痕跡を失ったと解釈できる。

3. 例外

本稿の仮説の例外となるのは 75 語中 12 語である（6）。これらの例外は別の原理で説明する必要がある。

(6)　a.　語末が狭母音である B 類の第 4/5 類名詞

*zeni B「銭」，*mogi B「麦」，*kimi B「黍」，*joru B「夜」，*ai B「藍」

*kasu B「糟」，*kinu B「衣」，*nomi B「鑿」，*ori B「瓜」，*siru B「汁」

b.　多形態素性の証拠がなく、かつ語末が非狭母音である C 類の第 4/5 類名詞

*kuda C「管」，*pune C「船」

*zeni B「銭」は漢語なので、借用が関わる可能性がある。*mogi B「麦」と*kimi B「黍」は穀物を表す名詞なので、他の穀物を表す B 類名詞、*kome B「米」、*mame B「豆」（以上第 3 類）、*awa B「粟」、*ine B「稲」、*nae B「苗」（以上第 4 類）との類推が疑われる。*joru B「夜」には、同義的な*jo B「夜」との類推が疑われる。*ai B「藍」については、*aka- A「赤い」を除いた色彩形容詞が B 類であること、特に*ao- B「青い」が B 類であることから、類推が疑われる。*kuda C「管」は紡織の器具を表す名詞なので、文化借用が疑われる。残りの 6 語の説明は今後の課題である。

4. 結論

本稿は、第 4/5 類名詞における分裂対応は、1) pR における語末狭母音と 2) pR の段階まで保持された pJ における多形態素性とに条件付けられた分裂の結果であるとする新しい仮説を提案した。この仮説は分裂対応を、pJ における対立の反映ではなく、pR において第 4/5 類が分裂し、一方が第 3 類と合流した結果とみなす。この仮説には例外があるが、それが仮説にとって致命的なものであるか否かは、金田一の類別語彙にない第 4/5 類対応の名詞（e.g. pR *wosa B「筬」、*kase B「綛」、*naba C「茸」、*nodo C「喉」等）にまで考察対象を広げて、仮説を検証することで明らかにできる。

謝辞　本研究は JSPS 科研費 17H02332, 19H00530, 21H04351, 21K00517 および国立国語研究所共同プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」「消滅危機言語の保存研究」の助成を受けている。

引用文献

[1] 有坂秀世（1932）「古事記に於けるモの假名の用法について」『國語と國文學』9(11): 74–93
[2] de Boer, Elisabeth. 2010. *The Historical Development of Japanese Tone*. Wiesbaden: Harrassowitz.
[3] Frellesvig, Bjarke and John Whitman (eds.) (2008) *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. Amsterdam: John Benjamins.
[4] Frellesvig, Bjarke and John Whitman (2008) Evidence for seven vowels in proto-Japanese. In [3], 15–41.
[5] 服部四郎（1958）「奄美群島の諸方言について―沖縄・先島諸方言との比較」『人類科学』11: 79–99.
[6] 服部四郎（1978−79）「日本祖語について」『言語』7(1) –8(12). 東京: 大修館書店.
[7] 平山輝男・大島一郎・中本正智（1966）『琉球方言の総合的研究』東京: 明治書院.
[8] 平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫（編）（1992–93）『現代日本語方言大辞典（1–6）』東京: 明治書院.
[9] Igarashi, Yosuke. (under review). Reconstruction of Ryukyuan tone classes of Class 2.4–2.5 nouns.
[10] 上代語辞典編集委員会（編）（1967）『時代別国語大辞典：上代編』東京: 三省堂.
[11] 菊千代・高橋俊三（2005）『与論方言辞典』東京: 武蔵野書院.
[12] 金田一春彦（1960）「アクセントから見た琉球諸方言の系統」『東京外国語大学論集』7: 59–80.
[13] 金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究―原理と方法』東京: 塙書房.
[14] 国立国語研究所（編）（1963）『沖縄語辞典』東京: 大蔵省印刷局.
[15] 神野志隆光・山口佳紀（1997）『古事記注解 4』東京:笠間書院.
[16] Martin, Samuel E. 1987. *The Japanese Language through Time*. London: Yale University Press.
[17] 松森晶子（1998）「琉球アクセントの歴史的形成過程―類別語彙 2 拍語の特異な合流の仕方を手がかりに―」『言語研究』114：85–114.
[18] 松森晶子（2012）「琉球語調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』16(1), 30–40.
[19] 松本克己（1974）「古代日本語母音組織考－内的再建の試み」『金沢大学法文学論集文学編』22: 83–152.
[20] McCarthy, John J. and Alan Prince. 1993. Prosodic Morphology: Constraint interaction and satisfaction. *Linguistics Department Faculty Publication Series* 14 (Retrieved from https://scholarworks.umass.edu/linguist_faculty_pubs/14, February 22, 2021).
[21] 仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』東京: 角川書店.

[22] 新田哲夫（2009）「白山麓白峰の方言特徴と昔話に見られる方言の語法」『金沢大学歴史言語文化学系論集: 言語・文学篇』1: 15–56.
[23] ONCOJ (2020) *Oxford NINJAL Corpus of Old Japanese*. (Retrieved from https://oncoj.ninjal.ac.jp/, February 22, 2021).
[24] 大野晋（1977）「音韻の変遷（1）」『岩波講座日本語 5』147–219. 東京: 岩波書店.
[25] 大野晋・佐竹明広・前田金五郎（編）（1974）『岩波古語辞典』東京: 岩波書店.
[26] Pellard, Thomas (2013) Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system. In Bjarke Frellesvig and Peter Sells (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 20, 81–96. Standford: CSLI Publishers.
[27] 島原第一尋常高等小学校（編）（1975）『島原半島方言の研究』東京: 国書刊行会.
[28] Shimabukuro, Moriyo (2007) *A Reconstruction of the Accentual History of the Japanese and Ryukyuan Languages*. Folkstone: Global Oriental.
[29] 小学館国語辞典編集部（編）（1989）『日本方言大辞典』東京: 小学館.
[30] 徳川宗賢（1990）「日本の方言―日本語の形成とのかかわり」崎山理（編）『日本語の形成』東京：三省堂.
[31] Unger, J. Marshall (2010) New etymologies for some Japanese time-words. *Journal of the American Oriental Society* 130 (1): 35–41.
[32] 上野善道（1996）「名瀬市芦花部有良方言の名詞のアクセント体系」『東京大学言語学論集』(15): 3–68.
[33] 上野善道（2010）「琉球与那国方言のアクセント資料（1）」『琉球の方言』34: 1–30.
[34] Vovin, Alexander (2008) Proto-Japanese beyond the accent system. In [3], 141–156.
[35] Vovin, Alexander (2010) *Koreo-Japonica: A Critical Study in the Proposed Language Relationship*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
[36] Whitman, John, B. (1985) *The Phonological Basis for the Comparison of Japanese and Korean*. Doctoral dissertation, Harvard University.

---

[i] OJ o_1,e_1 は（1a）のような母音連続から二次的に生じたとする見解がかつては支配的であったが[24]、服部[6]以降の琉球諸語研究によって、その一部は pJ *o, *e を反映するという見解が受け入れられている。pJ *o, *e は OJ *u*, i_1 にも反映するが（pJ *omi「海」> OJ umi_1、pJ *medu「水」> OJ mi_1du）、これは Mid Vowel Raising（MVR）と呼ばれる音変化の結果である[4,6,26]。OJ の o_1,e_1 は、もし pJ に母音連続を再建する動機がないのであれば、特定の条件下で MVR が阻止された pJ *o, *e の反映ということになる。Frellesvig & Whitman [4]によれば、形態素境界が MVR を阻止する。彼らの仮説は OJ mo_1ko_1 ~ $muko_1$「婿」（< pJ *mo-ko）のような二重語の存在に動機づけられている。彼らによれば mo_1ko_1 は pJ *mo-ko の多形態素性が保持された方言における反映形であり、$muko_1$ は多形態素性が失われた方言における反映である。

[ii] mo_1mo_1「腿」を認めるか否かに関しては異論がある。mo_1 と mo_2 の区別は古事記にのみ認められ、「腿」を含むとされるのは $mo_1mo_1nagani$ の 1 例のみである。しかしこれは「腿」ではなく mo_1mo_1「百」を含むとする見解も有力である[15]。

[iii] 各形態素の語源は必ずしも明確ではない。本稿が語源分析のみにより多形態素形式を主張するのは、先行研究における合意に基づく pR *jado, *naka, *mae, *mado（4）のみである。多形態素性を示唆する独立の根拠を持つその他の語にとって語源分析は必須ではない。注 iii~vi ではその他の語の語源分析を試みるが、アクセントについて語頭要素は L であり、後続要素は H を含むことを要件とする。いずれにせよ、語源分析の信頼性は本稿の枠組みの信頼性と独立に評価されるべきである。Unger [31]は、「今日」には*ki aru pu（来 有る 節）「来た時期」を、「今朝」には*ki aru asa（来 有る 朝）「来た朝」を再建する。Frellesvig & Whitman [4]によれば「婿」の後部要素は*ko「子」だが、前部要素は不明である。「箆」と「空」は借用語とする説があるが[36]、pJ に遡る多形態素形式を再建することも可能であろう。「空」は*su-war-a（素-割る-体言化）「何もない分割するもの」、あるいは*su-upa-ar-a（素-上-有る-体言化）「何もない上のほう」が再建できるかもしれない。「箆」の第 1 要素は*piw-「削る」（cf. OJ pi_2we-「削る」）の可能性がある。OJ pi_2we-「削る」における不規則な変化 pJ *i > OJ i_2 は後続の*w による逆行同化であろう。Martin [16]によれば「桁」は*ita「板」を後部要素に持つ。

[iv] 本稿は、OJ ko_2we と、中世日本語（MJ）の *kowe*（露出形）~ *kowa*-（被覆形）の交替とに基づいて、OJ に*ko_2wa-（被覆形）を仮定している。OJ *ko_2wa-は有坂法則に違反するので多形態素形式を再建せねばならない。一方で MJ *kowa*-は類推による新しい形式であり、MJ より前の段階には遡らないとする仮説もある[4,19]。この仮説では OJ ko_2we は擬態語 OJ $ko_2woro_2ko_2woro_2$ と関係するとされる。これに基づき Frellesvig & Whitman [4]は有坂法則に違反しない pJ *kəwər > *kəwəi「声」を再建する。この仮説が正しければ、「声」に多形態素形式を再建する根拠がなくなる。しかし pJ *əi は OJ $i_{(2)}$に規則的に変化するので[6,26]、pJ *kəwəi「声」を再建すると、在証されない OJ †*kowi* を予測してしまうという問題が残る。

[v]「跡」には 2.4 節で論じるように*asi-tə（足-跡）が再建できる。前部要素を*a「足」（cf. OJ *a-bumi*「鐙」）とする見解もあるが[10]、本稿では「足」には縮約が生じたと提案されるので（2.5 節）、*asi「足」の再建がより整合的である（*asi-tə > *atto）。「声」には pJ *kətə-wai（言-先端）「言葉の端」が再建できるかもしれない。*kətə は OJ ko_2to_2「言」と同源であり、*wai は OJ *suwe* 「末」や OJ *tuwe*「杖」の後半部と同源である。「咎」の語形成は不明である。「外」と「傍」の第 1 音節の母音の甲乙は不明である。もしそれが o_2 (< pJ *ə)であるならば、有坂法則の違反となるので、語中の形態素境界が再建されうる。もしそれが o_1 (< pJ *o)であるならば、語中の o_1 が MVR を回避しているので、やはり語中に形態素境界が再建されうる。「外」の第 2 要素としては*ka「処」（cf. OJ *sumika*「住処」）が考えられる。「傍」の前部要素は*sə「背」（cf. OJ so_2muk-「背く」、OJ so_2bira「背中」）、後部要素は*pa「端」（cf. OJ *pasi*「端」、OJ *patu*-「初」）かもしれない。

[vi] 第 1 音節末に鼻音を伴う「陰」（e.g. 白峰 *kaŋge*）が不規則な母音脱落によって生じたのであれば、pJ に*kanikai, *kanukai のような形が想定されうる。OJ $kage_2$ が「光」の意味も持つこと考慮すると、後部要素の候補として*uka「日」（cf. OJ *putuka*「二日」、 OJ *patuka*「二十日」[35]）や*kai「昼」（cf. OJ ke_2「日、昼」）が挙げられるだろう。「糸」は*itu「厳」（cf. OJ *itukasi*「厳橿」、OJ $ituki_2$「斎槻」）と*wo（OJ *wo*「緒」）からなる*itu-wo「神聖な紐」を再建できる可能性がある。